



TITLE:

[東洋史研究會]大會抄録

AUTHOR(S):

CITATION:

[東洋史研究會]大會抄録. 東洋史研究 2006, 65(3): 515-520

ISSUE DATE:

2006-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/138196>

RIGHT:

大會抄録

區田法の「復活」實施に見る金元時代の農業政策

井 黒 忍

漢代に氾勝之によって生み出された區田法は、作物ごとに様々な形状の窪地を作成して施肥・給水を行う集約農法である。まず、『金史』食貨志・區田法條によつて、國家主導の農業政策としては、ほぼ八〇〇年ぶりに再實施された金代章宗朝の状況を検討するとともに、侯馬金墓石柱の記載からその具體的實施規定や問題点を抽出する。

續く元代においても、既に中統年間より區田法は一部地域において實施され、至元年間以降においては、江南地域をも含めた全國レベルでその實施が命じられる。その具體的内容は、至順年間に編纂された『救荒活民類要』所收の關連史料により明らかとなり、さらにこれにほぼ一致する史料がカラホト文書中にも確認できる。この兩史料の比較對照を通して、全國的な農業政策として實施された區田法の内容や地域的差違を考察する。

金元時代における區田法は、漢代以來の技術を繼承するに止まらず、新たな要素を包攝するものであり、加えて水利事業が區田法實施に組み込まれることで、農業水利開發の推進が圖られている。また、農業技術の普及に關しても、區田法の圖化や歌訣の利

用といった方法が用いられ、耕作者レベルにまでその浸透が圖られた。自然災害や天候不順への對應策としての金元時代における區田法の復活實施は、その實施方法や技術普及のあり方、後世に與えた影響など、中國農業史上における独自の意義を有する施策であった。

清朝康熙年間の奏摺政治と地方社會

内 田 直 文

清朝皇帝は、私的な親展狀として臣下との間で直接交わす文書「奏摺」を使用した政治システムを創始し、政策決定過程をコントロールすることで、廣大な版圖に皇帝支配を及ぼそうとした。こうした所謂「奏摺政治」の運用が清朝支配體制の根幹に關わるものであるとすれば、政治上に奏摺を多用化するようになる過程を分析することは、清朝の政治構造や支配體制及び清朝皇帝のアイデンティティを考察する上で極めて重要である。

本報告では、康熙帝による帝權確立の過程において、中央決議機關である内閣や政務・軍務兩面に影響を及ぼしていた議政王大臣會議を越えたレベルで文書行政システムを構築する必要性を生じたことを明らかにする。また、モンゴル・チベット地域における軍事的緊張が高まるなか、康熙中期以降、實務能力に優れた八旗旗人が統治上の要地に派遣され、彼らと康熙帝との間で滿文・漢文奏摺を使用したコミュニケーションネットワークが形成された

ことを論じる。さらに、奏摺の使用幅は時代的・地域的偏差を帯びながら次第に擴大されていくのであるが、それは康熙時代における地方統治政策と密接に関連するものであったことを明らかにする。

『史記』の歴史意識

柴田 昇

本報告は、近代人が中國古代史を考える際の最も基本的な枠組みを提供してきた資料である、『史記』の歴史意識の特質に関する一つの試論を提示するものである。

『史記』についてはこれまでも多くの研究が生み出されており、特に近年は、『史記』を構成する原資料の性格、編集の過程、作者としての司馬談・司馬遷の歴史意識の差異など、多様な論點に關する優れた成果が發表されている。本報告は、それらの研究成果に學びつつ、『史記』に記された事實の選擇と配列を手がかりに、『史記』における歴史像構築の論理を明らかにすること、換言すれば、『史記』の歴史敘述を支えている世界觀の骨格を明らかにすることを目的とする。具體的には、『史記』に記された系譜と血縁關係に關する諸史料を題材に、本紀・世家・列傳の構成に關するいくつかの問題を検討してゆくことになる。

古チベット文獻研究の現段階

武内 紹人

中央アジア出土のチベット文書による歴史研究は、今新しい段階に入りつつある。二〇世紀前半、「編年記」や「年代記」などの史書や碑文の研究を中心に古代チベット史の基礎が据えられた。二〇世紀後半は、歴史研究は乏しかったが、文書の解讀と社會言語學的背景の解明が進んだ。すなわち、手紙、契約、法律文書、占い、木簡など各種文書の研究の結果、それらがチベット人だけでなく漢人、コータン人、ウイグル人など多様な人々によって書かれたこと、さらにチベット支配終了後の一〇世紀から一一世紀にかけても、チベット語・チベット文書・チベット佛教が河西から東トルキスタンの多言語多民族社會の共通軸であったことが判つてきたのである。同時に文書のデジタル化とデータベース化の進展によって、各文書の讀みを他文書と相互的にリンクして總合的に解釋できるようになった。これらの文書研究の進展をもとに、たとえば契約、法律文書と占い、木簡など從來別個に扱われてきた文書の關係が論究され、そこからチベット帝國の統治構造の全體像の解明を目指す研究が始まりつつある。本發表では、そのような古チベット文書研究の現状の一端を紹介したい。

アルジャイ石窟の興亡から見たモンゴルの 佛教信仰の歴史的變遷

楊 海 英

中國内モンゴル自治区にあるアルジャイ石窟（阿爾寨、現在中國の重要文化財）が注目されるようになってから、約一五年が経った。この間、さまざまな角度からの研究も漸く軌道にのっていった。石窟内に書かれたウイグル文字モンゴル語榜題や出土したモンゴル語・チベット語古文書類に關する研究は既にスタートしている。石窟寺院の歴史に關しても、部分的ではあるが、見えてきたものがある。

アメリカに亡命した第七世ディルワ・ホトクトの回想とモンゴル語古文書の記録、それに民間傳承等によると、歴代ディルワ・ホトクトが一時、アルジャイ石窟寺院を主宰していた。ディルワ・ホトクトがアルジャイ石窟にいたころ、石窟寺院はパンチン・ジョーと呼ばれていたことが明らかになった。その後、パンチン・ジョーは恐らく康熙年間にアルジャイ石窟から黄河以北にあるダラト旗の領内に移った。ディルワ・ホトクトは乾隆年間にも更に北上し、漠北にナルバンチン寺領を形成し、二〇世紀初頭まで繁榮した。

ディルワ・ホトクトはカギユ派の系統に屬する。彼らがいつごろからアルジャイ石窟寺院を據點に活動するようになったかは、

現時點ではまだはっきり分かっていない。ただし、カギユ派は西夏王國領内で積極的に活動し、モンゴル帝國のハーンらとも緊密な政治的關係を結んでいた時期がある。そのような歴史から考えると、アルジャイ石窟の歴史も古くからカギユ派と關連していた可能性がある。

後世に入つて、アルジャイ石窟が衰退に追い込まれたのも、ダライ・ラマのゲルク派とカギユ派との抗爭、そしてカギユ派が敗れたことと無關係ではなからう。

イブン・イナバ

——ティムール朝初期のサイイド／
シャリーフ系譜學者をめぐって——

森 本 一 夫

イブン・イナバ（一四二四年没）は、おそらくイスラーム史上最も名の知られたサイイド／シャリーフ系譜學者、つまりムハンマド一族の系譜を専門とする系譜學者である。特に、彼の主著『ターリブ家の系譜に關する探究者の支え（*Tunḍa al-Talīb fi Anṣab Al-Aṣṭalīb*）』は、インドからエジプトにいたる各地で幾度も刊行されており、つとに知られている。本發表は、このイブン・イナバを取り上げ、この人物の事績やサイイド／シャリーフ系譜學の歴史における位置づけを検討するものである。サイイド／シャリーフ系譜學史上初めて、アラビア語に加え、本格的にペ

ルシア語でも系譜文獻を執筆し、タイムール本人にも系譜文獻を獻呈したという実績をもつこの系譜學者の相貌を明らかにし、彼が現在最も知られるサイド／シャリーフ系譜學者となつた理由を考察するだけでなく、彼の活動が同時代の社會において持つていた意義をも考えてみたい。

「衙蠹」のいみするもの

——清初の地方統治と胥役——

山 本 英 史

「衙蠹」とは中國地方官署の實務を擔つた胥役に對して附せられ、とりわけ清初の官文書において「國家に寄生し、その屋臺骨を蝕む存在」の意味で多用された蔑稱である。本報告では、なにゆえ胥役が「衙蠹」と呼ばれたのかという問題を手がかりとし、その考察を通して清朝による中國地方統治の構造の一端について明らかにしたいと考える。

現存する順治年間の題本には「衙蠹」を主題にしたものが多數見られ、その作成者には督撫や刑部尙書を別にすると巡按御史が多いことが特徴的である。それは清朝が吏治肅正目的の一環として各地方の官僚たちに對し胥役の不正糾弾強化を求めたためである。

官僚たちは剔蠹（蠹を除去すること）を一貫して主張したが、他方で彼らは下僚の縱蠹（蠹を放任すること）の現實に直面する

ことになる。その原因は取り締まる側にあるというよりも胥役に實權を委ねざるを得なかつた中國地方行政の構造上の問題にあった。また、地方行政の現場を預かる州縣官の中には剔蠹がむしろ「弊害」を助長すると感じる者もいた。

清朝はこの實情に對し胥役制そのものの見直しをはかることなく、嚴罰の強化などの彌縫的な對處を行うだけあり、胥役の「不正」を抜本的に解決できず、その限りに對しては吏治肅正を果たせなかつた。「衙蠹」とはそのような胥役に對する清朝およびその使命を帯びた官僚たちのいわば「悔し紛れの表白」とでもいふべき稱呼だったのでなかろうか。

屬國と保護のあいだ

——一八八〇年代初頭、

ヴェトナムをめぐる清佛交渉——

岡 本 隆 司

東アジア近代、とりわけ一九世紀後半の國際秩序を説明するのは難しい。清朝が從來、周邊國ととりむすんできた關係に、西洋近代の條約關係・國際關係が重なり、しかも一方が他方を必ずしも壓倒しなかつたからである。從來の理解は「朝貢システム」など、その概念的な圖式化にとどまつていた。最近ようやく、兩者が切り結ぶ局面の實證分析を通じて、そうした圖式的理解をみなおしつつある。中琉・清韓の關係は、その好例である。

しかし清末の對外關係は、個々の事例をそのまま一般化しただけで、すべてが説明できるものではない。相手國、時期、局面による異同をみきわめたうえで、總合してゆく必要がある。その作業の一環として、本報告は一八八〇年代に清佛戰爭を惹起した、いわゆる「越南問題」をとりあげることとしたい。いわゆるトンキン地方の支配權をめぐる清佛間の對立と交渉は、複雑きまる過程をたどり、とりわけ日本で研究が手薄だからである。

なかなか注目すべきは、北洋大臣李鴻章とフランス公使ブーレとの間で、一八八二年末に合意した李・ブーレ覺書である。これは清佛が軍事衝突する以前の段階で、その回避を目的に行った交渉の成果であり、まもなく破棄されたこともふくめ、雙方本來の利害關心をよくあらわしている。いかにしてこの覺書がまとまり、また效力をもちえなかったか、その事情をときあかすことが「越南問題」の實相解明に不可缺であらう。

戰時期日本の回教研究と「回教徒問題」

白 杵 陽

戰時期日本（一九三一—一九四五年）における回教研究は「回教徒問題」という時局に對應するかたちで發展していったものと捉え、中國との戰爭の關連でその特質を考える。というのも、「回教徒問題」は日本の中國侵略の文脈において、中國における回民・回族を國共合作および對ソ包圍網に動員するための「西北

問題」として語られ始め、その戦略的な關心は日中戰爭を境に回教・回教徒研究の組織化へとつながっていったからである。時局的關心としての「回教徒問題」が學術研究へと變貌を遂げる契機となったのは一九三八年に設立された回教圈研究所の活動と同研究所による『回教圈』の刊行であった。しかし、大學などの學術機關における回教研究の制度化には失敗したといえる。とはいっても、大日本回教協會の『回教世界』、外務省調査課の『回教事情』、東亞經濟調查局の『新亞細亞』などの回教圈の諸問題を對象とした雜誌も刊行された。さらに、回教圈に關する研究書や概説書も多數出版されて、回教への關心は高まった。そのような種の回教ブームの中で、歴史學の分野で回教あるいは回教徒がどのように捉えられていたかも同時に検討していくことになる。なお、本報告では當時の時代狀況をかんがみ、イスラームあるいはムスリムではなく、回教あるいは回教徒という用語法をそのまま使用する。

唐代墓誌銘の史料上の諸問題

愛 宕 元

唐代史研究において墓誌銘などの石刻史料を利用することは今や常識である。限られた文獻史料では知り得なかった新知見が一次史料たる墓誌が記述してくれているからである。ただ唐誌の過半を録文だけではなく、拓本寫眞によって見ることが出来るよう

になった現時点では、唐誌の史料としての諸問題もまたいくつか浮かび上がってくる。まず第一に唐誌には後世の偽刻がかなり含まれていることである。とくに歐陽詢、蘇靈芝、顔真卿などの名筆家が書者となっているものは、偽刻ないしはかれらの傳世の眞筆拓本を後世に模刻したものが間々存在するので、注意を要する。したがってこれに類するものは拓本寫眞を精査することが絶對に缺かせない。第二には沒年や葬年をより古い年次に改竄したり、官品をより高位に書き換えた事例がかなり多く見出せることで、特に唐誌を隋誌に改竄したものが目に附く。第三には既知の七〇〇〇點にのぼる唐誌全體を通讀して體得できる、唐誌獨得の文體上の特徴や定型的表現から逸脱するものや過剰な補刻ないし追刻のあるもの、とりわけ誌文の讀後に文體上での定型的體例からの逸脱を覺えるようなものについては取り扱いには注意を要する。以上のような唐誌の問題點を具體例を擧げて述べてみたい。

後世の編纂物である文獻史料に對して、墓誌が同時代に書かれた一次史料であるからといって、墓誌の記述内容が無條件に優先させたり、個々の墓誌を文獻以上に信賴すべきものとして安易に位置附けるのではなく、唐誌全體に目を通した上で、その史料としての價值が吟味されるべきであらう。